脳神経科学と宗教

——自由意志と決定論の問題を中心に——

方 俊 植

イギリスの宗教哲学者であるジョン・ヒック(John Hick)は、常に自然主義に対して宗教を擁護してきた。ヒックの宗教論の特徴は、宗教多元主義を展開しながら積極的に宗教的実在論や死後世界などを容認することである。したがって、超越者や超越的な実在に対するヒックの宗教体験の議論は、彼の宗教論を構成する重要なテーマの一つであるとも言える。

しかし、最近、脳神経科学の発展は宗教にとって大きな脅威になっている。なぜなら、脳神経科学を中心とする自然主義の立場は、宗教を根本的に批判するからである。脳神経科学における自然主義の立場は以下のようなものである。「心脳同一論」は、心と脳の状態と過程は同一であるから、心は脳という物的実体にはかならないのである。ここで、問題になるのは「意識」がどのようなものであるのか、明確に規定できないまま、「意識」は脳の活動であると断定することである。そこで新たに登場する議論が随伴現象説(epiphenomenalism)である。ヒックは、随伴現象説が、脳と意識の二元論の修正型というかたちで「心脳同一論」とは異なると見なす。そして、消去的唯物論(elim.-native materialism)もある。こうした自然主義の立場を宗教を擁護する立場からみると、問題になるのが自由意志と決定論の問題である。注目すべき点は、脳神経科学と宗教の問題にお

いて扱われるのは、伝統的な神学的、あるいは倫理的な決定論ではなく、主に一七—一八世紀の物理学を中心とする自然科学の発展に伴う物理的決定論が議論の中心になっているということである。こうした物理的決定論にしたがうと、これまで、「神」によって決定されると信じてきた人間の行為、あるいは道徳的な考慮などは自然の法則によって決定されることになる。ヒックは、わたしたちの日常生活において、自由意志があるとすれば広範囲におよぶ内包的な因子(enclosing factors)によって条件づけられ、制限されているということは疑問の余地がないと主張しつつ、自由意志に関する非両立者の見解を導く。私たちが何らかのしかたで行動するとき、ときには自発的に、あるいは創造的に、自分にも他人にも全く予測できない決断をくだすことがある、というものである。

ヒックの議論にしたがうと、道徳的な領域と芸術的な領域がこれに当てはまるのである。勿論、芸術的な創造性などが機械的に決定されるという可能性を否定はしない。しかし確認すべきことは、理論上可能であるとしてもそれが事実であるとは限らないのである。では、ヒックが展開する自由意志と決定論の真の争点はなにか。

ヒックの結論は以下のようなものである。「物理的な決定論をさけること、自由で物理的な判断と誠実な道徳的な判断を容認すること、ならびに非物理的なものの存在と物理的実在と同様に容認することになる。……物理的な宇宙と同様に、非物理的な実在も存在することになる。」

こうしたヒックの結論は人間の宗教性を尊重しつつ、超越的

な実在などの存在も認めるのである。そして、こうしたヒックの考え方は、彼の宗教思想全般を通してよく表れている。

J・ヒックの自由意志論

——神経科学の挑戦に対する一応答——

保 呂 篤 彦

神経科学の成果が人文学の領域にも影響を与え始めている。宗教研究の分野も例外ではない。日本宗教学会においても、すでに神経科学の成果に基づく提言に対して批判的な応答が数年前から継続的に為されている。宗教多元主義の唱道者として名高い宗教哲学者・キリスト教神学者J・ヒックもまた、二〇〇六年の新著『宗教と科学の新しいフロンティア』において神経科学からの挑戦にこたえようとしているが、彼の応答は、人間の「自由意志」を擁護することに大きな力を注いでいる点で、特徴的であるように思われる。

ヒックが対決する神経科学に基づく自由意志否定論には心脳同一論と随伴現象論とがあるが、自然主義的な神経科学者や心の哲学者の議論の多くが近年では後者を取るため、彼の議論の中心も後者に向かう。後者は前者と異なり、心(意識)を非物理的現象と捉える点で二元論ではあるが、それが思考や行動を発動する力をもたず、ただ脳の活動を受動的に反映するだけであるとするため、自由意志否定論を帰結する。有名なりベットの実験は、ある行為に関係する運動準備電位がその行為を行お

うという意識的意志(決意)より以前に生じることを示したため、準備電位として現れる脳神経の作用が原因となつて意識的意志が生じたと解釈することが可能であり、そのため多くの研究者によって随伴現象論を支持するものと見なされてきた。しかし、ヒックはこの準備電位をその後を生じる意識的意志ではなく、おそらくはそれに先立って働いているであろう心の無意識の働きと関係づけることによって、随伴現象論を避け、むしろ本来の心脳二元論を擁護する方向で解釈する。

このように無意識の働きに着目するところから、その後のヒックの議論は、身体的行動を生じるような、その発生の時点を問題にしうる決意としての意志作用ではなく、むしろ科学や芸術においてみられる創造的な「知的自由」の作用の検討に向かい、その結果、「自己言及の問題」という論点に基づいて随伴現象論の自由意志否定論を論駁することになる。大胆に単純化すると、脳決定論者の議論は、脳決定論を生みだしてそれを主張するといふ彼自身の思考過程自体にも当てはめなければならぬということであり、そうすると、世界が決定されていることをいいたい「誰」が「知る」のか、また、そもそもそのような決定された世界で、特定の神経状態が「真」や「偽」という価値をもつと言えるのか、といったような困難な問題が生じるのであり、ヒックもまたこの点を突くのである。ヒックも述べているが、この種の議論は決して目新しいものではなく、多くの論者によって支持されている強力な議論である(ヒックは言及していないが、例えば、批判期直前のカントも類似の議論を展開している)。しかしながら、それでもなおこれに抵抗する